
異形の花嫁

村上まゆみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異形の花嫁

【Nコード】

N1406J

【作者名】

村上まゆみ

【あらすじ】

鮎川千沙は、田舎に住む平凡な若い主婦だった。夫も同じ田舎出身の、純朴な感じの青年で——特にこれといった刺激もなく暮らしている。

けれども、ある日夫が土砂災害に遭って死亡し、千沙は二十九歳ながら未亡人となる。その後、千沙のまわりでは一見して偶然のように見える、不思議な出来事が次々と起きはじめ……！？

第1章

小さな頃、わたしはその丘陵地帯を『妖精ヶ丘』と呼んでいた。

両親は田舎の農村で農業と酪農を営んでおり、家のまわりには二百ヘクタールほどの畑地と牧草地が広がっていて、そのなだらかな丘陵地帯はやがて見渡すかぎりの平野となり、緑したたる森へと繋がっていた。

我が家と同じように農業を営んでいる隣家へいくだけでも五キロほどあったので、少し大袈裟に言えば、わたしは人界からやや隔絶された環境下で育てられたと言えるかもしれない。

もちろん小学校にも中学校にもきちんと通ったし、高校は少し離れていたので下宿したけど、その後大学へ進学しひとり暮らしをはじめめる頃には——至極平均的で平凡な女子大生に成長していたのではないかと思う。

大学では稲の専門的な研究をし、卒論のテーマには「遺伝子組み換えによる環境への影響」を選んだ。その後、農協に就職し、同じ職場の真向かいの机に座っていた男と結婚することになり、わたしは専業主婦になったというわけだ。

実家のほうは父の弟夫婦とまだ小さいその子供たちが継ぐことに決まっていたので——わたしはひとり娘だったが、なんの心おきなく夫の『鮎川』の姓を名乗ることができた。

わたしの故郷は十勝平野で、札幌にある大学院を卒業してから地元へ帰ってきて農協に就職したのだったが、夫の鮎川徹もわたしと似たようなもので、彼もまた札幌の某大学の畜産科を卒業したのち、故郷へ戻ってきたのだった。

徹の両親もわたしの父や母と同じく農業を営んでおり、三男の夫は実家を継ぐ必要はなかったが、それでも田植えの時期や収穫期には人手が足りないということで駆りだされたし、そういう時にはわたしも、鮎川家の嫁としてその勤めをないがしろにするわけにはい

かなった。

都会で暮らしている人はたぶん——旅行や、ちょっとしたドライブなどで十勝平野を通りすぎる時、こう思っているのではないだろうか。「なんて広々とした大地、もしかしたらこういうところでのびのびと農業をするのも悪くないかもしれないなあ」と。

だが、農業というものは世間一般の人が抱いているそんな漠然としたイメージ以上に厳しい側面を持っているし、一見して、家族が仲良く共同作業に勤しんでいるように見えたとしても——一度その輪の中へ入るなり、それこそ色々な人間ドラマがあったりするわけである。そのところは一般の会社の人間関係とそう変わるものではないとさえ思うことがあるくらいだ。

農家におけるその閉塞性については、一度そこに属したことのあつた人間にしかわからないものだとなつては思っているし、たとえばわたしは大学院を卒業しているわけだけれど、ただそれだけでもうすでに——三男の嫁はくうちらゝとは違うよそ者という扱いを受けたりすることがある。たとえわたしの両親が同じ十勝平野という大地に根ざし、同じように汗水流して農業を営んでいたとしても。

もちろん、嫁姑問題や後継ぎの問題、夫の親族とのつきあいにまつわる悩み、というのは遥かな昔、人間が誕生した頃から連綿と続いていることなわけで、わたしにしても「まあ、誰と結婚しても避けて通ることはできない問題」として諦めてはいる。

でもそれにも関わらず時々——何故わたしは今の夫と結婚したのだろっ？と疑問に感じてしまうことがある。いや、他にもつといい結婚相手がいたはずだとか、わたしはそんなことを言いたいわけではない。

夫は善良を絵に描いたようなとても良い人だし、生活面についても特に不満があるというわけではない。朝早起きしてお弁当を作り、夫を仕事に送りだしたあとは——平日はそのほとんどが毎日、悠々自適なプライヴェートタイムである。

花壇や家庭菜園などの手入れをし、十時三十分にはお茶の時間を

楽しみ、午後からは買物へいったり、ドラマを見たり好きな本を読んだりと――わたしはその静かな、とても満ち足りた生活を愛していた。にも関わらず、ただひとつだけ問題になるのは……わたしが夫のことを心から愛してはいないという、そのことだった。

――では、それならば何故結婚したのか？

答えは簡潔にして極めて明瞭だ。夫はわたしに交際を申しこんだ生まれて初めての男性であり、二年もつきあううちに自然と「そろそろ結婚しようか」ということになったという、ただそれだけである。

昔からわたしは人見知りをする質で、おそらく今の夫と結婚していなければ、婚期を逃してオールドミスになっていた可能性が高い。また夫のほうでも「もし千砂と結婚していなかったら、いまだに独身だったと思う」と言っているとおり――いわばわたしたちふたりは、似た者夫婦といってよかった。

育った環境も同じだし、卒業した大学も同じなら、年齢も二十九歳で一緒だった。そして趣味は読書と音楽鑑賞その他といったところで、ふたりともインドア派だった。

徹は童顔で、眼鏡をかけており、どこことなく田舎風のお坊っちゃんといった雰囲気、ほのぼのとした純朴な青年である。わたしたち夫婦の関係は結婚前の交際当時から、めくるめく愛のときめきとか情熱とかなんとか、そんなものとはほとんど無縁だったといっている。知りあつてから今日に至るまで、一度も喧嘩らしい喧嘩すらしたことがないし、夫婦間の夜の生活に、特別何か強い刺激があるというわけでもない。それでもまあ、友達のように仲がいいし、お互いにたぶん、二十年後や三十年後も同じような感じだろうなあ、という話を庭いじりをしながらするという、そんなカップルだ。

経済的な基盤も大体安定しているし、将来にも特に不安はない。ただ結婚して二年以上にもなるのに、子供ができないということだ

けが——悩みの種といえば悩みの種かもしれないかった。

徹はのんびりとした穏やかな性格の人なので、「そのうちコウノトリが……」などと、メルヘンチックなことをいつも言っている。わたし自身も体のどこにも特に異常がない以上、三十五歳くらいまでになんとかひとり出産できたらな、とゆったり構えてはいるつもりなのだ。

しかし、夫婦間ではそのように意見が一致しているにも関わらず——夫の実家へいくたびに「千砂さんももう二十九なんだし」とか「そろそろひとりくらい生んでおかないと」と必ず一度はせつつかれてしまう。夫は三男で、長男の稔さんが実家の農業を継いでいるのだけれど、すでに四人の子供がいる。男の子がふたりに、女の子がふたりだ。姑はしょっちゅう口癖みたいに「早穂子さんはうまいこと産みわけたなあ」と褒めているが、それはわたしが実家へいった時だけの話で、嫁と姑の関係は、実はそううまくいっているとは言い難いらしい。

ちなみに次男の直人さんは現在、東京のほうでひとり暮らしをしており、三十一歳の今も独身だという話だった。

実をいうと、徹は三男とはいえ、姑と舅にとっては秘蔵っ子のよな存在で、義兄自身でさえ、三人の兄弟の中で両親から一番可愛がられて育ったのではないかと認めているくらいなのだ。であるからして、ぜひ徹の子供の顔を一日でも早く見たい——と姑と舅はそう強く望んでいるというわけなのだ。

前に一度、田植えを手伝いにいった時、こんなことがあった。姑と舅は苗を運び終わったビニールハウスの後片付けをしており、わたしがたまたま、ふたりを手伝おうと思ってそばへ近づいていった時のことだ。

「徹も、早くわしらに孫の顔を見せてくれるといいんだがなあ。稔の孫は確かにみな可愛いが、わしはあの嫁が好かん。直人は年に一度も帰ってこないどころか、便りひとつ寄こさんし、結婚したとしても住まいが東京では赤の他人と大して変わらんじやろ。そこいく

と徹んそこには期待が持てる。いわゆるスーブの冷めない距離つちゆうやつで、互いの間を行き来しとるし、千砂さんは控え目ないいい嫁っ子だしな」

「オラはあまりそう思わんがね」と、もんぺ姿の姑が言った。姑は自分のことをいつも、オラというのだ。「確かに千砂さんは控え目で大人しいかもしれんが、ちよつと何考えとるんだか、わからんところがあるからね。その点、早穂子さんはハッキリ物を言う分、スツキリするところもあるよ。なんというのかねえ、千砂さんはインテリだから、夜のほうはあんまし積極的じゃないんじやないかね」「かもしれないなあ」と、舅はビニールハウスのビニールを骨組みからとり外して、姑と一緒に畳みながら言った。「わしらの若い頃は今みたいにTVゲームに熱中することもなかったし、田舎の村の娯楽なんてたかが知れとったから、夜に夫婦ふたりつきりになれば、布団の中でする以外、特に楽しみもなかったもんだけどなあ」

ここでふたりが声を揃えて豪快に笑いだしたので、わたしは半分裸になったようなビニールハウスの中へ、入るに入れなくなってしまった。トラックに乗って苗を水田まで運んでいた早穂子さんに、お義父さんたちを手伝うよう言われてきたのだけれど——結局わたしはそのまま歩いて水田にまで引き返し、田植え機を運転していた稔さんに「急に具合が悪くなったので帰ります」と一言告げて、家まで帰ることにしたのだった。

べつに、義理の父と母の本音の会話がショックだったというわけではない。わたしはこれと似たような経験を、それまでの人生の中で何度となく繰り返していたから——「ああ、まただ」と思って急に心と体に力が入らなくなってしまったという、それだけのことはあった。

わたしは六歳になって幼稚園に入学するまで、同じくらいの年の友達と遊んだという経験がなかった。今でも思いたすのは、初めて人と手と手を繋いでお遊戯した時の違和感と、いつも隣に座ってい

た女の子の、意地の悪い顔つきだった。

その子は何かにつけ「ああしなさい、こうしなさい」とわたしに命令し、大人しい素直な子だったわたしは、いつも黙ってただ言うなりになっていた。ところがある時それをくいじめゝだと思つたおせっかいな男の子が——先生にそのことを報告し、わたしのことを彼女の席の隣から移動させるべきだと言つたのだ。

その子は女の子のグループのリーダー的存在だったから、たちまちわたしはのけ者となり、聞こえよがしの意地悪な言葉の数々を浴びせられる結果となった。

男女がペアになつて踊るということになつた時——例のおせっかいな男の子は真つ先にわたしのところへやってきたけれど、わたしはただ泣きじゃくることしかできなかった。

正直いって、子供ながらも、その男の子の気持ち嬉しくもあった。でもここで彼と手と手を繋いで踊つてしまつたら、あとからまた他の女の子たちに何を言われるかわからないと思い、わたしはただめそめそと泣くことしかできなかったのだ。

「千砂ちゃん、泣いてるじゃない。きつとあんたと一緒に踊るのが嫌なのよ。あつちにいつて他の子を探したら？」

例の意地悪な、目のつり上がった女の子は、どん、と彼の肩を押しのとけると、水玉模様のハンカチを貸してくれた。そしてわたしはその日からもう一度、女の子のグループの仲間入りを果たし、なんでもリーダーの彼女の言うなりになるという役目を演じることになったのだつた。

それから小学生の時も中学生になつてからも、また高校生の時にも——集団生活におけるわたしの役割は、大体似たり寄つたりだった。支配欲の強いリーダー的存在の女の子が近寄つてきて、まず仲間に入れてくれる。そしてわたしが都合のいい存在である間はさんざん利用し、何かちよつと不都合が生じてくると——一時的に仲間外れにされたり、集団無視にあつたりした。

自分ではそんな思春期の時代をとくに卒業したつもりでいたけ

れど、結婚した今でも本質的には何も変わってはいないのだと、わたしはそんな気がして、少しばかり落ちこんだ。

幼稚園の時、あの男の子の手をとってダンスしたいと思ったように——本当は自分はこうしたいという欲求を、わたしはこれまでの人生の中で、いつも押し殺してきたような気がする。そしてただ、人々の間の思惑の中で、「あの人はこうすべきだ」という位置づけに置かれるがまま、なんとなくその言うなりになって生きてきたのだ。

夫と結婚した時だって、特別「どうしてもこの人でなければ」という理由や衝動があったわけではない。ただなんとなくこれまでの人生の経緯からして——人生なんてこんなものという感じで結婚してしまっただけ過ぎない。

（人生なんて、どうせこんなもの）

わたしはまだ六つか七つだった時から、もしかしたらそんな諦観を身に着けてしまったのかもしれない。そしてもしあの時、あの男の子の手をとって踊っていたとしたら——その後の人生もまるで違っていたかもしれないなんて、これまで一度として考えてみたことはなかったのだ。

第2章

その日、夫はナイターの中継を見ながらわたしの話を聞くと、ビールを一缶飲み干したあとで、げっぷをしながら言った。

「そう気にすんなよ。子供なんて天からの授かりものじゃないか。おふくろたちだって、そのところはよくわかってると思うよ」

「うん。それはそうなんだけど……」

アンチ巨人ファンの徹は、巨人の連敗をすこぶる喜んでいる様子で、「清原、三振しろよ」などと言いながら、空になったビールの缶をぐしゃりと潰している。

彼には特別応援している球団というのはなく、ただとにかくひたすら巨人以外の球団を応援するという、ちよつと変わった人だった。「そろそろ不妊療法とか、考えはじめたほうがいいのかなって……」

「やった！三振！」

夫はスキヤキの鍋に伸ばした手をとめると、ガッツポーズを決めている。

わたしは軽く溜息を着きながら、もう不妊療法のことは一切口にしないことにした。もともと夫は、医者を決めた日にモルモットみたいに性交するのは嫌だと言っていたし、わたしにしてみたところで、そのために産婦人科にかかることを想像しただけでも——ずっしりと気が重かったからだ。

その夜、わたしは夫の寝息を闇の中で聞きながら、幼稚園の時、わたしの手をとろうとしてくれた男の子のことを考えた。彼もたぶん今ごろは結婚して、一児か二児、あるいは三児のパパになっているに違いない。

もし仮に街のどこかですれ違ったとしても——わたしには彼のことがわからないし、彼のほうでもわたしのことなんてすっかり忘れてしまっているだろう。

でももし何かのきっかけがあつて、もう一度会うことが叶うとし

たら——あの時のことをあやまりたいような気がした。本当はわたしもあの時、あなたの手をとって一緒に楽しく踊りたかったのよ、とそう言って……。

姑の言っていたとおり、確かにわたしは昔から、何を考えているのかわからない子だと、まわりの人間からはそう思われていたらしい。

そのことにはもしかしたら、わたしが四歳の時に死んだという、実の母のことが関係しているのかもしれない。

母はわたしが四歳の時、食糧を求めて人里まで下りてきた熊に襲われて亡くなった。

わたしにその記憶はまったくないが、父の話によると、母は子供でも母は死ぬまで、子供のわたしのことをぎゅっと抱きしめたまま、離そうとはしなかったのだという。

母の死後間もなく——東京から、母の姉と名乗る女性が現れ、父と再婚することになった。

わたしは自分の母親に姉がいることも知らなかったし、また母方の祖父母にも会ったことがなかったで、その人が突然天から降ってきたように感じたのを今もよく覚えている。しかも父にしてみたところで、東京へなど一度もいったことがなく、ふたりが交際している気配といったようなものもまったくなかったのだ。

わたしの今の母——弓野千帆は、母のお葬式で初めてわたしの父、阿川大介と出会い、その時神さまのお告げを聞いたのだという。

「この男と結婚しなさい」と。

わたしの伯母というか母は、敬虔なクリスチャンで、いわば神さまのお告げのとおり父と結婚したわけなのだ。母のお葬式の数日後に、東京の義姉から電話がかかってきて「あなたと結婚したいのですが」と言われた時、父は不思議とまったく驚かなかったという。母の葬式でわたしには伯母にあたる女性に会った時、もしかしたら

そうなるかもしれないという予感がしたというのだ。

かくしてふたりは世間の風評などまるで気にすることなく、すぐに役所へ婚姻届けを提出しにいったというわけだ。

この新しい母はわたしにとって、生みの母よりも近い存在といつてよく——事件のショックからかどうか、わたしには実の母の記憶といったものがまったくといていいほどなかった——わたしは聖母マリアさまのような、理想的な母親に育ててもらったといっても過言ではないくらいだった。

血縁上は伯母にあたる彼女は、わたしのことを妹の忘れ形見として、決して過保護というのではなく、とても大切に慈しんで育ててくれた。父もそんな彼女のことを愛し尊敬していたし、わたしたち三人は本当の親子のように仲良く、幸福に暮らした。

それでも、父と母が喧嘩する出来事というのがひとつだけあって、唯一宗教面においてだけは、ふたりは対立しあっていたといっている。

父は決して熱心な仏教徒というわけではなかったけれど、昔から何かと縁起を担ぐ人で、形式的な意味においてのみ敬虔な葬式仏教徒とも言っただろうか、そういう感じの人だったので、母の信じるキリスト教については理解できないものとして軽視していた。

母は仏教式のお葬式やお墓参りなどには父と一緒に参列したが、それでも家の神棚には決して手を合わせようとしなかったのを、わたしは覚えていて。そして日曜日には教会の礼拝に出席するので、父は毎週休みになると、朝は必ずといっていいくらい、機嫌が悪くなった。他でもないこのキリスト教の神が、自分と今の妻との結婚を導いたにも関わらず。

でも、父にとっては父なりに理想的な家族の休日の過ごし方というものがあり——もちろん、いくら日曜とはいえ家畜の世話やら色々、すべき仕事はあるのだけれど——母が礼拝にわたしのことを連れていこうとすると「おまえひとりではいいじゃないか」とか「千砂のことは今日は置いていけ」などとよく言ったものだった。

わたし自身についていえば、キリスト教の日曜礼拝というのは、子供心にもなかなか楽しいものだったと記憶している。といっても、小さな頃は幼児祝福の意味も、賛美歌の歌詞の意味も、牧師さんのお説教の意味も、何もわからなくはあったのだけれど——それでも礼拝が終わり、牧師さんの祝福を受けて荘厳なオルガンの音とともに礼拝堂をあとにする時、自分が心の底から魂を清められたような、そんな気持ちのすることが多かった。

もつとも、わたしは今教会に通っていないし、実際のところ、再び教会へいきはじめて日曜日の午前中毎週家を留守にするということになると——徹がどんな顔をするかはわからなかった。

朝ごはんの支度だけしておけば、快く「いっておいで」と言ってくれるかもしれないし、それでもそれが毎週のことになると、彼も父のように「今日は家にいろ」とか、そんなふうに機嫌悪く言うようになるのかもしれない。

なんにしても、キリスト教という元は異文化の宗教を知ったことは、わたしにとって精神的にプラスに作用することが多かった。クラシック音楽やオペラを聴くにしても、また海外の文学作品を読むにしても、聖書に対する基礎的理解があるのとないのとは大きな違いが生じてくるからだ。それと美術館に本物の絵画を観に行く機会のある時でも——西洋絵画の場合、その絵の描かれた背景を知るためには、キリスト教の知識が必要になることが多かったためだ。

思えば、夫と親しくなっただききっかけも、そうした芸術的教養を通してだったような気がする。徹は大のクラシックファンなのだけれど、彼はキリスト教的な理解を抜きにしてその音楽に深く傾倒していたわけで、とにかく自らの感性が命じるままにバッハの『マタイ受難曲』やモーツアルトの『レクイエム』などを「素晴らしい！」と感じていたらしい。そしてわたしはそういう彼の芸術に対する理解の仕方をとて好きになったのだ。

シルヴィ・ギエムの『ボレロ』を観にいった時、彼は憧れのプリマドンナに花束を渡すと、その帰り道で子供みたいに頬を紅潮させ

ていたっけ…… そうした少年のような純粹さ、変に知識をひけらかして蘊蓄を語ったりするでもなく、「よくわかんないけど、このところがいいよな」とクラシックの大好きな曲を聞きながら指揮棒を振る真似をしたりするところ…… そうした彼の感受性の豊かさや性格の素直さといったものにおそらくわたしは惹かれたのだろう。そうした心の美しさはわたしの内側にはないものだったから、彼の中にあるそうした人間らしい強い情熱——もしかしたらわたしはそれを、分けて欲しいと願ったのかもしれない。あるいは、彼と結婚したら自分もそうなれるかのように一時的に錯覚してしまったのかもしれない。

こんなにお人好しで優しい、純粹で素直な愛すべき夫を、本当には愛することができないだなんて、わたしは自分でも時々、自分のことが不思議になって仕方がない。

徹のほうに「愛」という名の強い情熱があつたことだけは間違えようがなく、それであればこそわたしは彼と結婚したのだけれど——わたし自身はいえ、打算的で冷静な理性によって彼と結婚したようなものだった。

そして時々、こんなふうに考えることがある。わたしが夫の子供を妊娠しないのは、わたしが彼のことを本当は愛していないからに他ならないのではないかと。

だから夫が出張で、帯広から北見へ行く途中、土砂災害に巻きこまれて死んだという話を聞いた時も——わたしは涙一粒零さずに、まるでアメリカかヨーロッパで遠い親戚が死んだという知らせを受けとったとでもいうように、警察からの電話を冷静に聞いていた。

『昨夜零時五十五分頃、土砂災害に巻きこまれて亡くなった鮎川徹さん（二十九歳、農協職員）は、帯広から北見へ向かう途中で事故に遭ったと見られ、現在警察では災害の起きた原因などを調査中です』

そんなTVのニュースを見ていても、徹の死がいまひとつ実感できず、わたしは葬式の間中も、やはり泣くことはできなかった。

桐の棺に納められた、土気色の彼の顔を見ても、まるで遠い他人のように思え、自分はもしかしたら夫の死のショックのあまり、それを現実として認識できていないのではないかとさえ思ったほどだ。しかし、やはりわたしは病気などではなく正気だった。それに悲しくもないのに悲しいふりだけするということもできなかったので、終始無表情だった。

そして姑が「何を考えているのかわからない」と言った、あの不透明な態度と無表情な顔とで弔問客に挨拶したりしたものだから、当然といえば当然のことながら、わたしは夫側の親族たちに変な不評を買った。さらにそんな状況下でありながらも頭の隅のほうでは——子供もいない以上、いずれ向こうとの関係も希薄となり、三回忌を迎える頃には義理だけのおつきあいになっているだろうと冷静に分析している自分がある……わたしはあまりにも冷たい、そんな理性の人間である自分が、ほんと嫌になって自己嫌悪に陥った。そんなこんなで珍しく一致団結した姑と早穂子さんに何やかやと陰口を叩かれつつもとりあえず葬儀のほうは無事に終わり、その後二週間が過ぎた。でもやはりわたしはその頃になっても——依然として徹のために泣けないままだった。

（どうしてわたしは、彼のために泣くことができないのだろう？）
自分でもそのことがとても不思議だった。せめて嘘でもいいから、涙を流すことができたらどんなに楽だろうとも思った。

「ごめんね、徹」

わたしは仏壇の上の彼の遺影に手を合わせてあやまった。黒枠の写真の中には、スーツ姿のはにかんだような笑顔の青年の姿が収まっている。

「どうして泣くことができないのか、自分でもよくわからないけど……心の中に喪失感のようなものは確かにあるの。あなたがいなくなっただけ寂しいとも思う。でもね、どうしてなのか泣くってということ

ができないの。他の人たちみたいに大声でわあわあ泣き喚くことができたらどんなにすつきりするだろうって、自分でも本当にそう思うのに……」

「——千砂がもしそうできていたら、おふくろたちの受けもよかつただろうにね」

それは空耳のようなものだったかもしれないけれど、わたしにはその言葉が夫の肉声として、すぐ耳のそばで囁かれたもののように聴こえた。

「トオル……？」

もちろん仏壇から後ろの居間を振り返ってみても、なんの気配もありはしなかった。それでもわたしがその声に小さな慰めを見出そうとしていると——ピンポンと呼び鈴が鳴った。

一体誰だろうと思いつつ、紫檀の仏壇の前から立ち上がり、わたしは玄関へ向かった。お義母さんや早穂子でないことを、心の中で手を合わせながら祈りつつ……。

「やあ、どうも」

ドアの前には夫の二番目の兄、鮎川直人の姿があった。二年前、彼は仕事の都合でどうしても結婚式には出席できないという返事をしていたので——実は会うのは、徹のこのお葬式が初めてだった。

黒の礼服を脱いだ、トレーナーにジーンパンというラフな格好をした彼は、どこか懐こそうな微笑みを浮かべており、子供みたいに「入ってもいい？」と、わたしに聞いた。

「ええ、もちろん」

童顔なのは鮎川家の血筋なのだろうか？彼もまた徹と同じく、実際の年齢よりも五つは若く見えた。また雰囲気的にも彼には徹と似たところがあり——人懐こい子犬のような、どことなく憎めない感じの表情をいつも顔に浮かべている。ただ顔立ちのほうはいくら似ていても、背丈は彼のほうが二十センチばかりも高く、徹が昔よく「俺の背が低いのは兄貴がその分を持っていったからだ」と言っていたの思いだされて、なんだかおかしかった。

「直人さんは身長、おいくつなんですか？」

ソファに座る彼の前でお茶を入れつつ、わたしは聞いた。徹はお茶にうるさい男だったので、普段家で飲むのもいつも、高級の玉露ばかりだった。

「百八十五センチくらいかな。といってもまあこれは、高校生の時に計った身長だけだね。今はもしかしたらもう二、三センチ伸びているかもしれない」

「徹がつきあいはじめた頃、よく言ってたんです。自分の背が低いのは、兄貴が本来の自分のとり分を持っていったからだって。その時兄弟三人が写った写真を見せてもらったりして、ああなるほどなあって頷いたりしてたんですけど」

「もしかしてそれ、畑の耕耘機の前で撮ったやつじゃない？うわ、だせえ」

彼は十年前にもなる記憶の青写真を頭の中からとりだしたみたいで、暫くの間、ひとりで笑っていた。三人の兄弟が手に熊手や鍬を持ってふざけたポーズをとっているその写真は、確かにわたしも最初に見た時、声にだして笑った記憶のある代物だった。

「悪かったね、結婚した時に会いにこれなくて……親父やおふくろは俺が東京で何やってるか実はあまりよく知らないんだけどさ、当時は友達と小さな会社を起したばかりの時だったから、色々忙しくてね。金銭的にもあの頃が一番苦しい時でもあったから……正直北海道まで帰ってくる旅費にも困ってたくらいなんだ」

「あの、お義母さんからは、IT企業で働いてるって、そう伺ってたんですけど？」

「うん、そう」と言ってる彼はわたしからお茶を受けとり、少しの間お茶の香りをかいでから、それを一口すすった。「そういう会社の代表取締役をしてるってわけ。友達が社長のね。でも親父やおふくろにそんなふうに言くと、何かと心配するだろ。だから普通の会社で平社員みたいに働いてるって、そう言ってるんだ」

「凄いですね。仕事のほうは大変そうだけど……でもやり甲斐はあ

「それでしよう？責任のほうは重大でも、自分で方針を決めてある程度それに沿った仕事ができるわけだから」

「……何か……」

あいつ、ハネムーンにいった時の写真と一緒に、物凄くノ口けた手紙を送ってきたんだぜ。『いくら兄さんが俺より男前で背が高くて、こんな可愛い嫁さんを手に入れることはできないだろう』ってね。あいつ、よっぽど背の高さにこだわってたんだな」

小さな頃の思い出を懐かしむような、優しい眼差しで。そしてわたしはそういえば、と思った。彼もまたわたしと同じように、葬式の間中、一度として号泣したり嗚咽を洩らしたりすることはなかった。

気にしないほうがいいよ。変な話、日本人はみんな勘違いしてるかな。葬式で泣くことのできる人間はみな善人で、そうできない人間は人非人みたいに。泣きたくても泣けないほうがどんなにつらいかなんて、そんなふうに考える思考能力がないんだ」

たく予期していない、突然の涙だった。でもそれは、夫の存在の喪失を嘆く未亡人の涙ではなく——自分の本当の心を理解してもらえたことに対する、半分嬉しい気持ちの入り混じった、複雑な涙だった。

「いや、気にすることはないよ。弟は本当に君のことを愛していた。俺は上の兄貴と昔から折り合いが悪くてね、それが家を出た一因でもあったんだけど……徹の奴はしょっちゅう手紙やら何やら、色々

と氣遣つてくれた。俺の心の中で家族と呼べるのは、今でもあいつひとりだけなんだ。こんな三十にもなる大の男が大人気ないって思うかもしれないけど……俺は親父のこともおふくろのことも、心の中では離縁してる。たとえ死に目に会えなくても、後悔することはないだろう。でも徹にだけは、ああもしてやりたかったしこうもしてやりたかったって、本当にそう思うんだ。だから君が……千砂さんがあいつのことを幸せにしてくれたことを、俺は心から感謝している。本当に、ありがとう」

直人さんは鮎川家の親戚一同を代表するみたいに、わたしに向かって頭を下げた。彼らがわたしに色々聞こえよがしにひどいことを言っただのを、代わりにあやまるみたいに。

「そんな、わたし……わたしは徹に何もしていません。むしろ、わたしのほうこそ……」

（——愛のないひどい女だったのに、彼には幸せにしてもらいました）

まるでその心の眩きが聞こえたみたいに、直人さんとわたしはそのあと暫くの間ずっと、互いに見つめあったままでいた。徹が果たして、手紙の中でわたしのことをどんなふうに兄に語っていたのかはわからない。でも今、お互いを理解しあうのに——わたしたちは言葉による説明を必要としなかった。

彼はそのあと、「それじゃあ」と言つてソファから腰を上げ、何もなかったように帰っていったけれど、翌日空港へ向こう前にもう一度わたしの家へ立ち寄った。そしてわたしたちはその時、互いに我を忘れるくらい激しく抱きあったのだった。

第3章

数日後、アメリカはシアトルが消印の、一枚の葉書が届いた。消印はシアトルだけれど、写真には何故かグランドキャニオンの雄大な景色が写っていて、不思議とわたしは一度そこへ実際にいったことがあるような、奇妙な既視感を覚えた。

<お元気ですか?……なんて、ありきたりの社交辞令を書くのもなんだか恥かしいけど、俺は元気です。できることなら、明日にでも千砂に会いたい。もし君が同じ気持ちでいてくれるとしたら、とても嬉しい。日本へ戻り次第、すぐにまた連絡します。 直人 >

その葉書を受けとった時、わたしの心中は複雑だった。何故ならわたしの中では――あの時のことは、一度限りのこととして処理されていたからだ。確かに、彼とのセックスは今まで夫と持ったことのあるどの性交渉よりも密度が濃くて刺激的なものではあった。彼と別れたあと、次の日もまたその翌日も、肉体的に力が抜けてぼうつとしたまま過ごしたというのも事実だ。でもだからといって、亡くなった夫の兄とこれ以上深い関係になりたいという気持ちはなかった。

直人さんにはきつと、わたし以上に相応しい女性がどこかにいるに違いなかったし、いつてみればわたしという存在はいわば――彼にそうした女性が現れるまでの繋ぎに過ぎないといってもいいだろう。そのことがわたしにはよくわかっていた。抱かれていてそう感じたのだ。彼は常に前へ前へと前進してゆくタイプの人間で、終わった過去については冷酷なくらい執着がなく、たまたま目の前にいる女はわたしかもしれないが、そのうちまた新しい現在形の女性が現れるに違いないと。

とても孤独で、でもそれゆえに自由な魂――そういう心の持ち主

と長く関係を持つとしたら、火傷したり傷ついたりするのはいつもこちらのほうなのだ。これ以上分の悪い関係は他にないといってもいいくらい。

わたしは直人さんから届いた葉書を真つ二つに引き裂くと、さらに重ねてもう一度破いてから、ゴミ箱に捨てた。そして自分が強い理性を持つ人間であることを感謝した。これでわたしがもう少し感情的な人間だったとしたら――夫を喪った寂しさから、義理の兄との愛に盲目的に溺れていたかもしれないから。

それでも、直人さんから電話がかかってきて、彼のあの優しい響きを持つ声を聞いてしまったら、自分でもどうなるかはわからなかった。まるで催眠術にでもかかったみたいに、もしかしたら彼の言うなりになってしまいかもしれない――そう思ってたが不安に日々を暮らしていると、ある時電話のベルが鳴った。ナンバーディスプレイを見て、たぶん徹の四十九日のことだろうかと予感しつつ受話器をとったのだが、長男の嫁はもしもと言う間さえ与えず突然、

「直人さんが亡くなったのよ!」

と息急き切って叫んだ。

「飛行機事故ですって!ちょうど今TVでもニュースが流れてるわ!なんていうことでしょうねえ、まったく。ついこの間徹さんが亡くなったばかりだっていうのに……もしも?千砂さん聞いている?」

早穂子さんの甲高い声を、なんだかまるでワイドショーのリポーターみたいだと感じつつも、わたしはなお言葉を失ったままだった。「ロサンゼルスからニューヨークへいく途中で事故に遭ったんですって!びっくりしちゃうわよねえ、もう……お義母さんなんかもう家で半狂乱になって泣き叫んでるわ。お義父さんの話によるとね、なんでもお義母さんは子供の中では一番、直人さんのことを心にかけて毎日仏壇の前でお祈りしていたくらいだったんですって。わたしだって四人の子供の親ですもの、お義母さんの気持ちは痛いくらいよくわかるわ……千砂さんもなるべく早く、お義母さんを慰める

ためにうちへきてもらえないかしら？」

——そのあと、わたしはなんて言って義理の姉からの電話を切ったのか、よく覚えていない。たぶん、わかりましたとかなんとか素っ気なく答えて、受話器を置いたのだろうとは思っけれど……そのあとの記憶が五分ほど途切れている。何故ならば、電話を切るか切らないかのうちにわたしは失神して、その場に倒れてしまっていたから。

親の心子知らず、子の心親わからずとはよく言ったものだが、お義母さんは直人さんの事故死をきっかけにすっかり頭が狂ってしまい、遺体のない葬式の間中、痛々しいくらい「直人、直人」と叫んでばかりいた。当の直人さんは自分の親の死に目に会えなくても後悔することはないと言っていたけれど……過去にどんなことがあったにせよ、親子の絆といったものはそう単純なものではない。

葬式には当然、徹の葬儀の時と同じ鮎川家の親戚の面々が顔を連ねていたわけだが——お義母さんの痛々しいまでの気の狂いようにとにかくみな涙を零すばかりで、わたしのことを悪く言うような人はひとりも存在しなかった。それも当然といえばあまりにも当然のこと、気の狂ったお義母さんは鬼のように早穂子さんのことを邪険に扱い、何かとわたしのそばへ擦り寄ってきては「あんたにはオラの気持ちかわかるはずだ」と言っ、繰り返し手を握りしめてきたからだ。

この嫁と姑の逆転劇のようなものを、鮎川家の親族一同がどう受けとめたかはわからないが、直人さんの葬儀がすんだ一週間後、奇妙な噂が彼らの間に流れていただろことは確かだった。何故かといえば、直人さんが多額の保険金をわたし名義で残していたからで、以来彼らからは毎日のように家へ電話がかかってくるようになった。「何か困ったことがあったら遠慮なく言ってね」だとか「早穂子さんのことをできるだけ助けてやってくれないか」とか、その他どうでもいいような他愛のないことでしょっちゅう電話のベルが鳴った。

もちろん、わたしにはわかつている。べつに彼らは保険金のおこばれにあずかりたいとか、そんな気持ちで電話をしてくるわけではないのだ。ただ、自分の夫の葬儀の時には涙ひとつ零さなかったに——義理の兄の葬式ではわたしが涙を見せていたために、生前ふたりの間にはきつと何かがあったに違いないと勘繰っているのだ。そしてあわよくばそのところの事情を聞きだせないものかと思い、彼らはしょっちゅう電話をしてきては、何かの拍子にわたしが口を滑らせはしないかと、待ち構えているというわけだ。

お義母さんはあれ以来すっかりぼけてしまい、早穂子さんは嫁として面倒を見るのに四苦八苦しているようだった。ところがわたしが夫の実家へいくなり義母の態度はころりと柔軟になるのだから、彼女としてはこれほど面白くないことはなかっただろう。実際、彼女たちふたりの間のやりとりはかなりのところ辛辣なものがあり、ひどい時には早穂子さんが「徹さんも直人さんも死んだのよ!」と怒鳴り散らすし、お義母さんは子供のように泣きわめく……そんなことが何度も繰り返された。

そんな時、お義父さんも義兄も見えて見ぬふりをしており、結局最後には義母はわたしの膝まで擦り寄ってきて、早穂子さんの悪口を小声で囁くのだった。

直人さんの四十九日が終わり、徹の百か日が済んだ頃だろうか、義父も義兄も家の中の戦争状態にこれ以上耐えきれないと思っただけで、ふたり揃ってわたしの元へと泣きついてきた。老人福祉施設に義母を入所させるにしても、あと一年以上は待つことになる。老人ホームでは言われたらしく、その間できるだけうちにきて母の面倒を見てもらえないだろうかと彼らはわたしに向かって頭を下げた。「俺と親父がこんなことを千砂さんに頼んだってことが知れたら、早穂子のやつは面白くないだろう。だからこのことは内密で、こと、よろしく頼むよ」

「すまん、千砂さん。でもあんたも家にばかりいては気が滅入るじゃろ。ちょうどいい気分転換だとも思っ、うちにきてくれ

たら、わしらも助かるし、恩に切るよ」

このとおり、というようにふたりがわたしに向かって手を合わせるのを見てしまったのは、流石に断ることはできなかった。どちらかというと気持ちの中では、できるだけ早く鮎川家とは縁遠くなりたいうように思っていたのだけれど——でも彼女が徹と直人さんを生んでくれたからこそ、そのふたりとわたしは縁を結ぶことになったのだ。そう思うと、義母に対して何もせずに放っておくということとは、なんとなく人の道にもとることのような気がした。それでわたしはできるだけ早穂子さんの気に障らないような形で、お義母さんに会いに行くことにしようと決めたのだった。

ところで、鮎川の実家にはわたしにとって甥と姪にあたる子供たちが全部で四人いる。長男の真治くんは中学三年生で十四歳、長女の愛理ちゃんは中学一年生で十二歳、次男の圭太くんは小学五年生で十歳、一番下の萌美ちゃんは小学三年生で八歳だった。四人ともまあ大体のところ素直でいい子たちだったが、母親の早穂子さんからわたしの悪口を吹きこまれているのかどうか、徹と直人さんの葬儀以来、四人はわたしに対してよそよそしい態度をとるようになった。玄関口で偶然顔を合わせても、ぷいとそのままどこかへいつてしまったり、話しかけても無視したり……。まあ、子供というものはいつだって基本的に母親の味方をするものだし、わたしはあまり気にしていなかった。お義母さんも、早穂子さんに対しては手一杯我侘を言うのだが、わたしがいる時にはほとんどそういうことはなかった。いつの間にかオムツをとって部屋の隅にぶん投げておいたりだとか、せつかく作ったお昼ごはんを「まずい！」と言って口から吹きだしたりするようなことはまずない。

そのかわり、わたしにはひたすら同じことをテープレコーダーみたいにえんえんと喋り続けるのだ。もちろんわたしのほうで「その話はきのうも聞きましたよ」とか「一時間前にも同じことを言っていましたよ、お義母さん」と、たしなめたりすることはない。彼女の中では徹も直人さんもいまだ生きており、直人さんは東京で元気に

やっているし、徹はいい人を見つけて結婚した幸せ者ということになっただけ。

「直人も、あんたみたいな嫁つ子もらって、帰ってくるといいんだけど。なして直人は東京なんて行ったかなあと、オラは今でも時々不思議になるのさな。稔とは確かに昔から仲良くなかったけど、そのくらいでは家に寄りつかなくなるなんてこと、ないべさ……ここだけの話だけど千砂さん、オラは直人のことが子供の中では一番可愛かったのさ。なしてって、三人兄弟の中では直人が一番男前だったでな」

——この話をわたしは一体、これまで何百回聞かされたことだろう。普段、早穂子さんはお義母さんから一日に三回以上同じ話をされると流石にキレるということだったが、わたしは同じ屋根の下に暮らしているわけではないせいか、彼女に対して苛々するということはあまりなかった。ただとにかくひたすらお義母さんの言っていることについて相槌を打ち、林檎が食べたいと言えば林檎の皮を向き、散歩がしたいと言えば家のまわりの庭をぐるっと一周したりした。

義母はとりわけ、自分の家を飾る美しい庭を愛しており、しょっちゅう庭いじりをしていたわけだが、先週オニコの樹を剪定鋏で整えたくてたまらなくなったらしい。そこで脚立を持ってきて、ひとりちよきちよきやっていたわけだが、体勢を崩して脚立の上から転倒してしまったのである。その結果義母は腰を痛め、暫くの間ベツドの上で安静にしているようにと医者から言い渡されたそうだ。

だからその日、義母が喋り疲れて眠ってしまうと、わたしは今日は少し早めに帰らせてもらおうかなと思った。自由気ままな未亡人暮らしとはいえ、それなりに自分でやりたいこともあるし、ひとりきりで過ごす趣味の時間というのは、わたしにとって一番大切なものだったから。

けれどもわたしがお義母さんと一緒に食べようと思って持ってきたお弁当を片付けていると——珍しくも長男の真治くんがおばあち

やんの部屋へ入ってきて（普段はほとんど寄りつきもしないのに、だ）、わたしの隣の椅子に腰かけたのだった。

「ばあさん、寝てんの？」

スーとかピーという寝息を立てている義母のことを、彼はからかうような顔つきで、上から見下ろしている。

「しっ。今眠ったばかりなんだから、大きな声だしちゃ駄目よ」

わたしは口の前に人指し指を立てたが、真治くんは声をひそめるでもなく、いつもどおりの声音のまま、かつたるそうに伸びをしなから笑った。

「おばさんさあ、なんで毎日うちにくるわけ？徹おじさんからも直人おじさんからも保険金おりたんでしょ？俺がおばさんだったら、すぐにどっか遠くへ行ってひとりで暮らすな。こんな親戚が何十人もうじゃうじゃいる鬱陶しい土地に、いつまでもいることないじゃん」

「べつに、あたしは……」と言いかけて、わたしは言葉に詰まった。この子はこんなに大人びた物言いをする子だっただろうか？どちらかといういつも無口で、大人しい感じのする子だったのに。

「おばさん、俺はおばさんに美しい建前の話を聞きたいんじゃないぜ。おばさんが本当は何をどう思ってるのか、本音を聞かせてほしいわけ。どっちかっていうとき、早く死んでくれないかな、このババアとか、そんなふうにおばさんが本当は思ってるってことがわかれば、母さんもおばさんに対して理解ある態度を示せるんじゃないかと思うしね……で、本当のところはどうなの？親戚連中がみんな言ってるけど、本当は直人おじさんとできてたわけ？」

「何言って……そんなこと、あるわけないでしょう」わたしは咄嗟に否定していた。「直人さんはずっと東京にいて、徹のお葬式の時に初めて会ったのよ」

「ふうん。でも保険金の受取人はおばさんだったわけでしょう？どうも解せないんだなあ、そこらへんが。俺、昔からおばさんのこと好きだったしさ、べつにいじめようと思ってこんなこと聞いているわけ

じゃないんだ。ただ俺、見ちゃったんだよね、直人おじさんが飛行場へいく前におばさんの家に寄ったところ。で、悪いとは思ったんだけど、こっそり窓から覗いてしまったわけ。おじさんがおばさんと抱きあつてるところ」

もはや言葉もなく、わたしはただ真っ赤になってその場に立ち尽くした。真治くんは思春期の少年に特有の、絶対に嘘だけは許さないという純粋な眼差しで、わたしのことを貫き通していた。

「こんなこと言うからって、べつに俺、おばさんのこと軽蔑してるってわけじゃないんだ。むしろ逆になかなかやるじゃんっていうかさ、そんなふうにししか思ってないよ。あの小うるさい親戚連中や母さんに、そのことをバラそうとも思ってない。ただそのかわり……してほしいことがあるんだよ」

「何よ。ようするにお金欲しいの？」

全身に震えがきて、立っているのも難しいくらいだった。そのせいかどうか、物言いのほうもぶつきらばうになる。

「べつに、バラしたかったらバラしなさいよ。そしたらわたしはあなたの言うとおり、こんな鬱陶しい土地とはおさらばするだけなんだから」

「それは困るよ」義母がうーんと唸ったので、真治くんは流石に声をひそめて言った。「今、うちに誰もいないんだ。じいちゃんと父さんは畑のほうにでてるし、ガキどもは朋恵おばさんの子供たちと一緒に遊園地へいつてる。だから、その……ようするにさ、一回でいいからやらせて欲しいんだよ」

「何言ってるのよ！それに早穂子さんが……お母さんが上にいるでしょ！」

この話はここまでとばかり、わたしは鞆にタツパ類を詰め、タンスからナフタリンの匂いが強く漂う部屋をあとにしようとした。後ろから真治くんが追いかけてくる。まだ中学三年生だというのに、背だけはわたしよりも十センチ以上も高い。彼は玄関のところであたしの腕を掴むと、流石に上の母親の存在が気になるのか、小さな

声で囁くように言った。

「何も、今日じゃなくなっていていいんだ。もし気持ちが固まったら、その時教えてくれ。俺は、いつまでも待ってるから」

——どうして、一体いつどこで何があったから、こんなややこしくて複雑な事態にわたしは直面することになったのだろう？あれ以来わたしは、自分より十五歳も年下の甥のことを、意識するようになってしまった。それは何もひとりの男として意識しているということではなくて——ただ単にことあるごとに向こうが意味ありげな眼差しを投げかけてくるので、その度に保留にしてある例のく脅迫>のことを思いだしてしまうという、それだけのことではあったのだけれど。

そして結局、わたしは真治くんとも寝てしまった。どうしてそうなってしまったのかは自分でもよくわからない。とにかく、気がついたらそういう関係になっていた、としか。

彼は最初一度だけでいいと言ったにも関わらず——そしてわたしも本当に一回だけならと最初に強く念を押しておいたのに——毎週土曜や日曜になると、必ずうちへやってくるようになった。どうやら互いに秘密を共有しているという共犯関係には、一種独特の麻薬のような麻痺感覚が伴うものらしい。

わたしにしてみたところで、自分の甥とそんなことは絶対にできないと、強い道徳観念を持って拒もうと思えばそうできたはずなのだ。でも結局のところ真治くんが、わたしと寝ようと寝まいと直人さんとのことを誰かに話すことはありえないとわかっていているからこそ——逆に彼に対して心と体を開くという結果になってしまった。

そう。これでもし彼が十四歳という年齢ではなく、少なくとも十七歳くらいだったというなら、まだ問題はなかったかもしれない。彼は十四歳とはいえ、考え方もしっかりしているし、ある意味ではわたし以上に大人だとさえいえるような聡明な少年だった。小さな時から、一見無口で大人しいように見える表面の裏側で、普通の大

人以上に多くの物事について考えているような、そういうタイプの
子供だったのだ。

彼はいつも、自分の夢について話す。将来、大学を卒業して一人
前になったらわたしと結婚したいとか、煩わしい俗世間を離れて、
静かな場所で一緒に暮らしたいとか、そんな実現しそうな空想
のお話を。でもわたしはただ、高校受験であるとか、現実的なこと
は一切口にせず、ただ彼の言うことについて黙って頷くだけだ。い
つもお義母さんに対して、同じように相槌を打っているように。

そしてわたしが自分という存在を真治くんが人間として成長する
ための妨げになっているのではないかと思い、この土地から「消え
る」決意をした時——甥は雷に打たれて死んだのだった。

第4章

ほんの半年の間に三件も葬式をだしたということで、真治くんの葬儀の時にはもはや、鮎川家の親族はほとんど言葉もなく、ただ静かに声を押し殺すようにして涙を流すばかりだった。

義母には初孫が亡くなったということを知らせなかったのも、彼女は通夜にも告別式にも出席することなく、その間、わたしと家でふたりきりで過ごすことになった。それでもおそるべき動物の勘によつてというべきか、義母はしきりに「何かあつたんだろ」と、不安気な、落ち着かない様子でわたしに何度もそう聞いた。わたしもいつになくそわそわしている義母が気の毒でたまらず、思わず「実は真治くんが……」と言葉が喉まで出掛かったけれど、そんな不幸な真実を告げたところで義母が正気に戻るわけではないと思い、ぐつとこらえた。

『お義母さん、真治くんは本当は、わたしのせいで亡くなったんです』

どうしてかはわからなかったけれど、わたしは義母にそうすべてを告白したい衝動に駆られていた。実際には彼は、雷の鳴る暴風雨の中で放牧中の牛たちを囲いの中へ戻している時に突然雷に打たれたのだったが——その様子をほんの二百メートルほど離れた位置から目撃してしまった義父にも稔さんにも、それはにわかには信じがたい、まるで映画のワンシーンでも見ているような、ほんの一瞬のうちに起きた出来ごとであつたという。

「真治のかわりに老い先短い自分が死んでいれば……」

義父はまだ六十歳だったが、この半年ほどの間にめっきり白髪が増え、すっかり面やつれしていた。三人いた子供のうちのふたりが相次いで亡くなり、長く連れそつた妻が五十八歳という若さですっかりばけてしまったのだから、それも無理はない。その上、休暇をとって心と体を休めようにも、そうもいかない仕事でもあるので――

——義父だけでなく稔さんも早穂子さんも、天候の不順ということも重なり、今年の米や大豆の収穫については頭が痛いようだった。

「そういう時はね、ちーちゃん。お母さんはいつも神さまにお祈りすることになっているのよ」

救いがたい絶望の支配する鮎川家から帰る途中、車の中で昔母がよくそう言っていたことを思いだした。〈祈り〉——こんな時にそんなものが一体なんの役に立つ？と、誰からもそう言われてしまいそうだけれど、幼い時から母の祈る姿勢を見てきたわたしにとっては、それこそが今、唯一の救いとなるべきものだった。

もちろん、いまさら神の道に立ち返って真摯に祈りはじめたところで、徹も直人さんも真治くんも生き返ってきたりはしない。また、わたしが夫の喪も明けないうちから義兄や甥と肉体関係を持ったという罪が消えてなくなるわけでもない。でも、それでもいいから今は——神聖なる何かに向かって懺悔し、悔い改めたいような気持ちでいっぱいだった。

（あの三人は、わたしと関わったために死んだのだ）

何故そんなふうにいるのか感じるのか、自分でもうまく説明はできなかったけれど、直感と本能によってわたしははっきりとそう感じていた。おそらくあの三人は、わたしと肉体関係を持ったからこそ死ぬことになったのだ。そしてこれから先もわたしと寝る男は死ぬことになるだろう……今、わたしにはそのことがはっきりとわかっていて、もちろんこんなふうにいるだなんて、もしかしたらわたしは偏執病パラノイアにでもなりかかっていたのかもしれないけれど——短期間の間に身近な人間を続けて三人も喪ったせいで——でもはっきりと魂に直接感じるのだ。あの三人は普通の人間であつたにも関わらず、わたしという人間存在が帯びる〈呪い〉のようなものに抵触してしまつたがために、死ぬことになつたのだと。

——その夜、わたしはなかなか眠れなかった。心から神に懺悔し、悔い改めたいと思ひながらも、死んだ夫に対して不貞を働いたこと

を実際にはそれほど悪いこととも思えず、自分が悲しいのはむしろ、なんの関係もない直人さんや真治くんを自分の〈呪い〉に巻きこんでしまったためだと強く感じるからだった。

確かに昔から、自分は他の人間とは違う、という違和感をずっと抱えてわたしは生きてきた。でもそれは結局のところ、人間誰しもが時々感じることであり、一種の自意識過剰としてわたしは片付けてきた。それに、徹とは結婚して二年も一緒に暮らしていたのだ。自分が今感じている〈呪い〉というものがなんなのか、どういう種類のものなのかは言葉で説明することはできない。しかしそれでいながら——今この瞬間にも、確かに自分は〈見張られている〉とはつきりと強く感じるのだ。

「ねえ、そこにいるんでしょう？ どうしていつも黙ってるのよ。わたし、知ってるんだから……あんたがいつもわたしのそばにいたことでもずっと、無意識のうちにもなんとか無視しようとしてきたのよ。じゃないと、頭のおかしい変人だっていうことになると思ったから——どうしていつまでもつきまとうのよ。第一、殺すのなんなの関係もない直人さんや真治くんじゃなく、わたしを真っ先にそうすべきだったのよ」

寝室の壁の一角がみしりと軋むと、〈それ〉はわたしの横たわるベッドに向かつてゆっくりと近づいてきた。流石にわたしにも、そちらへ目を向けて、自分の〈呪い〉の元となっている者の正体を確かめる勇氣まではない。ただ掛け布団の下で息を詰め、何かが起こるのをじっと待った。ゼエゼエ、ヒューヒューというよくわからない存在の苦しい息遣いが耳元に聞こえる……金縛りにあうだろうか——と一瞬身構えたが、その正体不明の存在はただ、人間の理解できない言葉をひたすら囁くのみだった。

「マクミナ・シュ・ココ・イアレナ・ムンドス・ラカントス・ミルス……」

それはまるで何かの呪文のような発音だったが、不思議と〈彼〉が囁く声音は優しく、その響きにはわたしに懐かしいと思わせる何

かがあった。そう——それは遙か昔に確かにどこかで聞いたことのある言語なのだ。でも一体どこでそんな言葉を聞いたことがあるというのか、それだけがどうしても思いだせない。

やがてわたしには<彼>が自分の敵対者ではないことが段々にわかってきた。それで思いきって布団を払いのけると、自分の後ろを振り返って見た。

「！？」

そこには青いウィルオーウィスプ（人魂）が幾つも浮かんでいたが、わたしが振り返るなり、すぐにフツと消えてしまった。わたしはそんな驚くべき光景に直面したにも関わらず、少しも恐ろしいなどと思うこともなく——怖がる必要は少しもない、<彼ら>は自分の味方なのだと強く感じ、そのまま深い眠りの底へとつくべく、再び枕の上に頭をのせ、静かに目を閉じた。

第5章

——とても不思議な夢を見た。

雪のように白く美しい桜吹雪が舞い、あたりにはえもいわれぬような良い芳香が満ち、上を見上げれば鏡を鑄たような美しい水色の空があつた。そして下のほうには銀色の箱舟のような雲が幾つも浮かんでいる……今は姿が見えないけれど、その箱舟のひとつひとつにはどうやら、確かに誰かが住んでいるようなのだ。

(……ここはもしかして、天国なのかしら?)

わたしはそう思い、もしもそうなら、死ぬというのはそんなに悪いことではないとさえ感じた。そしてもしこの場所のどこかに、徹や直人さんや真治くんがいるのなら——自分はもはや罪悪感を感じる必要はないのではないかとさえ思った。

後ろを振り返って見ると、象牙でできたような大きな城があり、あんなに重量感のあるものがどうして雲の上に聳えることができるのだらうと、とても不思議な気がした。でもどうやらあそこが自分の住まいらしいと感じて、クレープデシンのドレスの長い裾を引きながら、わたしは雲の上を歩いていった。

「やあ、おかえり」

城の跳ね橋のところまで迎えにきてくれたく彼>はそう言った。堀のところには水晶のように透きとおった水がたたえられ、その上を時々、飛び魚のように翼の生えた魚がきらきらと宙に舞っている。

(……これはきつと夢なんだわ)

あまりにも現実離れた美しい光景に、わたしは心の中でそう呟いた。

背の高い、銀色の髪をした青年は女のわたしが恥かしくなるほど綺麗な、理想的に整った顔立ちをしており、どうしてこんな人が自分のことを待っていたのかと、わたしは不思議でたまらなくなつた。

彼は城の中庭までくると、赤い石榴の実のなる樹の根元にわたしを座らせ、手にリユートのような楽器を持ち、『取り替え子の歌』という歌を歌って聞かせた。

♪ 昔、ランシユドルフという悪戯好きな妖精がいた
彼はエルフの王のお妃になる娘をさらうと
地上の人間の子供とすり替えたのだ

あわれ、その人間の子供は殺されて
代わりに人間界では妖精の魂を持つ人間が
そうとは知らずに長く暮らしたよ

その娘は成長し、年ごろになると
ひとりの人間の男と結ばれた
エルフの王はそのことを悲しんだが
娘の幸福を思って彼女のことを諦めた

しかし、人間の男は彼女のことを欺いた
彼は他の美しい人間の女に心変わりしたのだ
エルフの王はそのことに激怒して
大地の精霊に彼の命を奪うようにと命じた

それなのに娘は今も気づかない
エルフの王が彼女のことをずっと待ち続けているということに……

（――徹が、わたしに隠れて浮気を？）
夢の中でわたしの意識がそう現実に立ち返った時、ベッドの上で
目が覚めた。

わたしは目に見える、手でじかに触れることのできるく現実世界を確かめるように、自分の顔や髪、それから木綿のパジャマやその下の肉体を何度も撫でた。

(…… あれは、決して夢じゃないんだわ。だって、ひとりの人間の頭が想像できる以上に素晴らしい、美しく恍惚とした世界だったもの。もしくあちら側へいけるといふのなら——飛び降り自殺をして死ぬということだって、そう大したことではないのかもしれないでもだからといって……)

その日、わたしは夕方までかかって家中の荷物を片付けると、夜は自分の、阿川の実家のほうへ久しぶりに帰ることにした。徹が亡くなった時から、父も母も、実家へ戻ってくるように何度も言っていたけれど——家へ戻るためではなく、この半年ほどの間に鮎川家のほうで三件も葬式が続いたため、すぐ隣に住む叔父一家に挨拶がてら、菓子折りのひとつも持っていかなばならないと考えていたからだ。

それともうひとつ。母とじっくり、色々なことを話しあいたかったからでもある。もちろん、妖精云々といったような、夫の死のショックのあまり、頭がおかしくなったかというような話をするつもりはまったくなかったけれど——母は神に対する強い信仰心を持っているせいか、昔から目に見えないく霊的守護のようなものを身に帯びている人だったから、暫くの間彼女のそばに避難していれば安全なのではないかと、そんなふうに直感したのだ。

わたしの父も母もいまだに、わたしのことを「ちーちゃん」と呼ぶ。この年になってもそう呼ばれるのは、人前ではちょっと恥しかったけれど、家に親子三人だけにいる分にはそんなふうにはまったく思わない。

父の弟が結婚し、二百メートルほど離れた敷地内に新婚の家を建てるまでは——わたしにとって実家は本当にくつろげる場所であり、どうしても人間として好きになることのできない叔父夫婦とは

結婚を機に関わりあうことを避けることができ、本当によかったと思う。

（考えてみたら、徹と結婚したことにはそういう打算もあったのかもしれないなあ）

かつての自分の二階の部屋から庭の桜の樹や、収穫の終わった畑、丘陵地帯に沈みゆく夕陽などを眺め、わたしはそんなふうにして二週間ほどの間、物思いに沈んだ。

徹が間違いなく確かに浮気していたという証拠はどこにもなかったけれど、今にして思えばそういえば……という心当たりは幾つかあった。それに、自分には彼を責める権利などないと思ったし、仮にそうであったとしても、何故か少しも腹は立たなかった。

（もし、わたしが彼を本当に愛していたなら、許せないと思ったかもしれない。でも本当には愛していなかったから——こんなにも虚しくあっさり、彼の浮気をなかったことのように許してしまえるのだろうか？それともわたしが本当には人間ではないから——結局のところ誰のことをも愛する、ということができないままなのだろうか？これから先も一生……）

でも少なくとも自分は、父と母のことは人間として尊敬しているし、愛してもいると、自分ではそう感じていた。無償で人に与える心、相手の立場を思いやる優しさ、動物や植物に対する暖かい眼差し……そういった人間が生きる上でもっとも大切なことをわたしは両親から学んだし、ほとんど遺伝的といってもいいくらい自分の血の中に両親の愛情が混ざりあっている、というようにさえ感じる。

『刈り入れ時は過ぎ、夏も終わった。

それなのに、わたしたちは救われない。

（エレミヤ書、第八章二十節）

わたしがパラパラと聖書を読んでいると、不意にその箇所が目にとまって、わたしは苦笑した。先週の日曜日、わたしは父や母と一

緒に、教会へいったのだけれど――幼い頃感じたようなあの神聖な空気を感じることはもはやできなかった。長年の母の献身的な神への態度を見てきたためか、今では父もまた敬虔なクリスチャンとして毎日曜、教会へ通うようにさえなっていたのだけれど、心の内に潜む罪悪感が厚い盾のようになっていたためか、わたしは自分が神の祝福とは遠いところに存在していると、そんなふうにしかなじることができなかった。

『倒れたら、起き上がらないのだろうか。』

背信者となったら、悔い改めないのだろうか。

わたしは注意して聞いたが、

彼らは正しくないことを語り、

「わたしはなんということをしたのか」と言つて、
自分の悪業を悔いる者は、ひとりもない。

（エレミヤ書、第八章四、六節）

『見よ。主の御手が短くて救えないのではない。』

その耳が遠くて、聞こえないのではない。

あなたの咎が、

あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、

あなたがたの罪が御顔を隠させ、

聞いてくださらないようにしたのだ。

（イザヤ書、第五十九章一、二節）

わたしには「そのとおりです、主よ。アーメン」と罪の告白をすることはできても、それ以上の強い信仰を持つことはできなかった。いくら『あなたの重荷を主にゆだねよ。主はあなたのことを心配してくださる』（詩篇、第五十五章三十二節）とか『だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書の言っているとおりに、その人の心の奥底から、生ける水の川

が流れ出るようになる』(ヨハネの福音書、第七章三十七、八節) というような、神の前向きな人間に対する明るいメッセージを何度となく繰り返し読んでも——それらの素晴らしく正しい言葉は、そのあまりにも正しい素晴らしさのゆえに、かえってわたしの心を苦しめるのみであった。

そしてそんな中で唯一、わたしの心を救ったのが、聖書の神の言葉ではない、人間の苦悩の言葉だった。わたしが今手にしている新改訳聖書は母のものではなく、幼い頃教会の牧師さんが使い古しになったのをくれたものだ。さらに、この聖書はすでに故人となつた方が教会へ寄付したものでらしく——あちらこちらに傍線や書きこみがたくさんしてあって、それらの人間の心の苦悩のあとこそがむしろ、わたしの今のあまりにも惨めな心を癒したといってもよかった。

『地上の人には苦役があるではないか。

その日々は日雇人の日々のようにではないか。

日陰をあえぎ求める奴隷のように、

わたしにはむなしい月々が割り当てられ、

苦しみの夜が定められている。

(ヨブ記、第七章一―三節)』

そこには赤いボールペンで波線が引かれた上、その上の余白部分に、こう書きこみがしてあった。「悪魔はその上、わたしの肉体の自由をも奪う。わたしは会社人間として長く、真面目に生きてきたのに——ガンが今、わたしのこの惨めな肉体を蝕んだ」……わたしはその箇所を読んで、魂に深い動揺と震えを感じ、目尻には涙が浮かんだ。そして完全に太陽が没した遠い地平に向かい、風に乗せるようにそっと、窓辺でこう呟いた。果たして<彼>および<彼ら>が、わたしの言葉を今、すぐそばで聞いているかどうかはわからなかったけれど。

「あなたたちがどう思っているにせよ、やっぱり人間は素晴らしい生き物なんだわ。あなたの統べ治める世界は確かに、天国のように素晴らしい夢のような場所ではあったけれど——それでもこの地上だって同じくらい……いいえ、もしかしたらそれ以上に美しい世界なんだわ」

わたしは日暮れ時の、夜の匂いがすぐそばまで忍びよった、静かな海辺のような天空を眺め、そこに一番星が輝いているのを見つけると、神聖な祈りにも似た誓いを胸に、静かにそつと窓を閉じた。

第6章

——その夜、わたしは<彼>と最後の話しあいをするために、夜中に家を抜けだして、近くの森へと出掛けた。空には満月が輝き、白樺林が雪のように白く美しく夜に映える中を、かつて母が死んだ場所へとわたしは歩いていった。

あの妖精の世界の夢を見て以来、それまでは消えていた幾つかの記憶をわたしは思いだしていた。実の母が熊に襲われて亡くなったあの瞬間のことも——あの熊は本当は、わたしのことを元いた世界へ連れ戻すために、使いとしてやってきただけだったのだ。それを母が邪魔したものだから、彼女は自分の娘を命がけで守ろうとするあまり、死ぬことになってしまった。それ以前に彼女の本当の娘は、彼らの手によってすり替えられていたとも知らずに。

（お母さん、あなたはわたしが四歳になるまで、本当の娘として可愛がって育ててくれた……今までそのことを忘れていて、ごめんなさい）

その記憶が甦るのと同時に、わたしは自分が本当の意味で<人間>になるのを——自分が人間らしい心を取り戻しつつあるのを感じた。徹が浮気をするようになったのもおそらくは、わたしの性格にどこか欠点があったからとかそういうことではなく——うまく言語化して説明するのは難しいけれど、わたしの中にそうした自分と同じく人間らしさ>を求めることができなかったせいではないかと、今はそう思う。そして直人さんや真治くんが死んだのも、元を辿ればそのことが原因だったのだ。わたしは人間の女としての容姿を秤にかけたとしたら、決して美人というわけではない。にも関わらず彼らがわたしに惹かれたとしたら、わたしに人間の女にはない別の要素が含まれているのを、魂の勘のよさというのか、鋭い嗅覚というのか、何かそうしたものによって嗅ぎとってしまったせいなのではないだろうか？

自分がこちら側の世界にいと、そんなふうにして自分でも自覚しないうちに周囲の人間に迷惑をかけてしまうから——本当は元いるべき、あなたの世界へ連れていってと、そうく彼に頼むのは簡単なことであつたかもしれない。でも、わたしはすでにこちら側の世界で人間として二十九年も暮らしてきたのだ。その間、楽しいことや嬉しいこと、喜ばしいことよりも、苦しかったことやつらかつたこと、悲しかったことのほうが多かつたような気がする。これはこの先の人生でも、そう変わりはないのかもしれない。でもそれでもいいのだ。いや、それであればこそいいのだ。わたしがこちら側の世界にいるせいで、どんなに少なくとも母を含めて四人、本当はそこで死ぬべきでない運命の人が命を落とした。だからわたしはどんなに苦しくてもつらくても、人間としてこちら側の世界に留まつて——その血の罪と十字架を背負つて生きていかななくてはならない……わたしはそう、心の中で覚悟を決めていた。

ミズナラの樹は葉をすべて茶色くし、風の中に力サカサという陽気な笑い声をたてている。その背後には夏の間はあまり目立たなかつた地味な杉が、すっかり葉を落とした樹々の群れの中で高くそびえ立ち、月光にその濃緑色の葉を照り輝かせていた。

青白い満月の光がこれだけ明るいと、森の中は懐中電灯などなくても、歩くのになんの支障もなかつた。人工的な明かりがなくて怖いというようにもまるで感じない。ただ人間の余計な思考能力といつたものが——木々の間に幽霊の姿を垣間見させたり、ただの鳥の泣き声を人間の悲鳴のように勘違いしてしまうという、それだけのことなのだろう。一度く彼らの正体というのがどんなものかさえわかつてしまえば、ちつとも怖いなんていうことはないのだ。むしろわたしは夜に森の中を歩きまわったりすることよりも、たくさんの人間が集まる葬式や法事のような場所のほうが、いくらおそろしいか知れないとさえ思った。

「ホウ、ホウ」

どこからともなく灰色のフクロウがやってくると、まるで道案内

でもするみたいに、わたしの五メートルくらい前方を飛んでいった。そして暫くの間森の小道をよちよち歩き、わたしが一メートルくらい背後に迫ると、また翼を広げて五メートルほど前に飛んでいく——というのを何度となく繰り返したあとで、わたしは木々が伐採されて開けた、小さな広場までやってきた。ここは国有林ではあったけれど、時々業者の人間がやってきて、森の手入れをしているのだ。道案内をしてくれたフクロウはこれで役目は終わりとはばかり、バサバサという羽音とともに樹間の闇へ消えゆき、わたしは満月の光の下、二メートルはあろうかという熊と、正面から向かいあった。

（あなたがわたしのお母さんを殺したのね。そうなんですよ？）

訴えるような眼差しで<彼>のことを見上げると、エルフの王はまるで実はこれは着ぐるみなんだよ、とでもいうかのように優雅な仕種で、わたしに樹の椅子に腰かけるよう手で示した。

そこには苔むした大木が横たわっており、わたしがそこに腰かけると、<彼>もまたわたしの隣に座った。彼は決して着ぐるみを着ているわけではなく、その証拠にすぐ隣に腰かけていると、熊特有のなんともいえない体臭がずっと鼻腔を刺激した。

「君のお母さんを殺したのは僕じゃないよ。信じてほしい——イルザ」メイ。確かに僕は自分のしもべに、君のことを迎えにいくよう命じはしたけれど、君のお母さんを殺せとは命じなかった。でもあのあと、神さまが大変お怒りになって、僕に天使を使わしてこう仰せられたんだ。君が死ぬまでの間は決して、そのことで人間界に干渉してはならないと。だから僕はその決まりを守ろうと思った。人間の齢はどんなに長くともせいぜい百年——僕らにとってはね、そんな時間、そう大した年月ではないんだよ。だから僕は自分のしもべにそつと、君のことを見張らせることにしたんだ。唯一ひとつだけ、僕らが神の命令を破つてもいい時というのがあからね——君はもう、そのことを思いだした？」

熊が人間の言葉をしゃべっている！などということより、わたしはイルザ「メイ」という自分の本当の名前の響きに、魂の震えのよう

なものを感じておののいていた。イルザ「メイ、それがわたしの本当の名前……そして彼の、エルフの王の名は……」。

「その名前を、ここで口にしてはいけない」彼は熊の手を口元まで持つていくと、しつ、と小さな声で囁いた。「まだそうしたことまでは思いだしてないんだね。無理もないよ。僕らにとっては人間の寿命ってというのは人間が犬や猫に感じるのと同じようなものではあるんだけど——二十九年という年月はそれだけ君にとっては長かったということだ。本当はもっと早く迎えにきたかったけど、ランシユドルフの手下どもの邪魔が入ってね、すっかり遅れてしまったんだ。さあ、もう少ししたらくエルフの門>が開くよ。もしこの機会を逃したら、次に門が開くのは人間の暦では来年の五月ということになる。僕はとてももう——一秒だって君のことを待ちきれないんだ」

「そんな……だつてわたし……」

彼にはどうやら人間の心を読む力があるようだったけれど、わたしの本心にはまだ気づいていないようだった。わたしの本心——そう。人間の側の世界に留まるという。

「どうしてそんなことを言うの？僕はまたてつきり君が——すっかり心の準備ができたので、今夜ここにきたものとはかり思っていたのに。人間なんて所詮、醜くて汚らわしい、寿命の短い生き物じゃないか。もちろん神の言うとおり、多少は見るべきところもあるかもしれないが……なんにしても、ここは君のいるべき世界じゃないんだ。もう何も言わなくていい、イルザ「メイ。僕にはすべてわかっている——君の夫となった男も、彼の兄も甥もみな、結局君のことを汚すことしかしなかった。彼らには君のほうに肉体的欲求があつて彼らと寝たわけではないということが決してわからないだろう。君はただ求められたからそのとおりにただけなのに……その価値がわからなかったから、彼らはみな死ぬことになったんだ」

「そんな……じゃあ、徹や直人さんや真治くんが死んだのは、やっぱりわたしのせいなのね？わたしと関係を持ったから、あの三人は

……」

「答えはイエスでもあるし、ノーでもある」と、熊の姿をしたエルフの王は言った。「理路整然と説明するのは人間の言葉だと流石に難しいけど、とりあえずやってみよう。つまり我々が人間の世界に干渉していいのは——大きく分けてふたつの法則にのっとってのことだ。ひとつ目は神から直接命令があった場合。そしてふたつ目が人間が間違いを犯した場合だ。地球のいたるところで環境破壊が進んでいるのはそのせいだといってもいいくらいだが、今そのことは脇に置いておくことにしよう。この法則は大きなものから小さなものにまで適用することができるとね、君の夫になった男の場合は、道徳的に過ちを犯したことが問題になった。こうした場合に初めて僕は神に対して約束の反古を求めることができるんだ。もちろん執行猶予期間があるので、その人間の心の状態を詳細に調べて嘆願書のようなものを作成しなければならいんだけどね……地球上に存在する人間全部というわけではないにせよ、こんなふうに調べられて何ひとつ埃のでない人間というのは存在しないものだ。もちろんこのことは不貞を犯した人間がその罪ゆえにみな死ぬといったようなことではない……そのことは君にもわかるね？そして君の義理の兄だが、彼はもともとあの飛行機に乗って死ぬことが定まっていたんだ。だから僕は自分のしもべに命じて、生命保険の名義をね、君の人間の名前にしておくように仕向けたんだ。人間はどうもこういう時、虫の知らせとかなんとか言うらしいが、まあそういうことにしておいてもいいだろう。あと雷に打たれて死んだ君の甥だが——彼はあのあと生きていたところで苦しみばかりの増す人生であることが目に見えていたのね、彼のせめてもの心の美しさに免じて、もっとも苦しみの少ない形で打つことにしたんだよ……僕は今、なるべく人間の君にわかりやすい形で説明をしたつもりだけど、向こうの世界へいけばね、君には言葉で説明する必要もなくすべて理解できるはずなんだ」

「そんな……そんなことって……」

——わたしは言葉を失った。そんなのはあんまりだとも思った。

確かに道徳的価値基準で裁くとすれば、徹は罪深い人間だということになるだろう。でもだからといって、それは死をもって贖わなければならぬほどの重い罪だったのだろうか？ 直人さんにしても真治くんにしても……生きてさえいたら、無限の可能性があったはずだ。わたしとはうまくいかなかったとしても、他に愛しあうべき女性を見つけて自分の家庭を築き、その中で幸福を見出すことだって……。

「イルザ」メイ。君は本当に可愛い人だ。この期に及んでもまだ、あんな汚れきつて墮落した人間のことを信じようというんだね？」

そんなのはまるきりナンセンスだ、というように熊は首を振ると、グルルル、と獣の声で鳴いて、わたしの頬をべろりとなめた。なんともいえない生臭い息がかかったけれど、わたしは少しも気にしなかった。

「僕は君を愛している……そしてこの長く短い間、君と引き離されたことを今は心から神に感謝しているよ。君は人間として修業を積み、エルフの王の妃として相応しい女性に成長することができたのだから。さあ、そろそろ門が開く刻限だ。最後に僕は、君が向こうの世界へいく前に支払わなければならない代償について、説明しなくてはならない」

「……代償って？」

わたしはごくり、と生唾を飲みこんだ。月の光に熊の赤い瞳があまりに輝き、初めてその中に本物の獣性のようなものを垣間見たような気がした。

「＜死＞だよ」

そう言うなり彼はすつくと二本足で立ち上がり、まるでダンスでも踊ろうと誘うみたいに、わたしの両手をとった。

「心配しなくてもいい……すぐにすむからね。本当は君が地上のどんな男にも心を動かされず、貞潔を守って清い生活を送っていたとしたら——君は＜死＞を味わうことなく、向こうの世界にそのまま

の姿で移ることができたはずなんだ。でも僕は君がそうできなかったからといって、そのことを残念に思っているわけではないよ。君はあまりにも優しすぎたんだ……だから男たちの誘いを拒めなかったという、それだけのことだ。それに痛みや苦しみを感じるのは、ほんの一瞬のことだからね。その儀式さえすんだら、君は常若の国ティルナ・ノーゲで、永遠に老いることもなく美しいままで、僕と一緒に暮らすことができるんだ」

「そんな……そんなことって……」

わたしはうるたえるあまり、ぶるぶると体が小刻みに震えるのを感じた。新聞のどこかに小さく、<熊に襲われ女性死亡>という記事が載っているのが頭の隅を掠める。もしそんなことになったら父も母も嘆くだろう。ふたりとも悲しみのあまり、神さまのことなど信じられなくなつて、信仰さえ捨てることになるかもわからない。

「怖いのかい？僕の可愛い人……でも君がこちらの世界にいるとね、微妙に周囲の人間に影響がでるんだよ。人間たちが最近言っている、バタフライ・エフェクトというのにちょうどよく似ているかもしれない。結局のところこうすることが、君にとっても君のまわりにいる人間にとっても、一番いいことなんだ」

（ちよつと待つて！お願いだからもう少し考えさせて！）

わたしは咄嗟にそう叫ぼうとした。でもそれは声にならなかった。<彼>はわたしの返事を待つこともなく、それが最善なのだという手際によさで——獣の爪によってわたしの心臓を抉りとおした。

鋭い痛みと甘美な恍惚が胸を貫いたのは、彼の言つたとおりほんの一瞬——わたしは醜い人間の骸を捨てると、風のような時間と空間の渦巻くゲートの中へと、吸いこまれるようにして永遠の伴侶とともに旅立った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1406j/>

異形の花嫁

2010年10月8日12時47分発行